「命の選別」は許されない

生き抜く

私たちがここに在ること。危険に満ちた混沌の世界で生き延びること。社会はこの先、どこへ向かうのか。一人一人の営みを通して生き抜くための道を探したい。

㊱ 能登の障害者施設 副施設長

「あぎし」の窓から遠くに海が見える。今村貴子は地震の発生で入所者を2階へ避難させた後、余震や津波を警戒して眠れぬ一夜を過ごした＝石川県輪島市門前町（撮影・今里彰利）

青空が広がる穏やかな正月だった。昼食は、寿の内弁当とすまし汁を入所者と楽しんだ。石川県輪島市門前町にある知的障害者の自立支援施設「ふれあい工房あぎし」。副施設長の今村貴子（59）は日が傾き始めた頃、同僚の職員3人と共に入所者38人の入浴の準備に取りかかろうとしていた。

津波の恐怖

だが平穏は突然打ち破られる。1月1日午後4時過ぎ、震度7の激しい揺れに襲われた。「押しつぶされる」。今村は死を覚悟し、机にしがみついた。2階建ての施設は一部損傷にとどまったが、停電で外部情報は遮断された。ある職員が「津波が来るかも」と漏らした一言でわれに返った。

約1キロ先は日本海だ。今度は大津波の恐怖に襲われた。職員が手分けして1階の入所者を2階に避難させようとしたが、入所者は大混乱。「怖い、怖い」。悲鳴が響き、座り込んで動こうとしない人や、窓から逃げようとする人が続出した。

「大丈夫だから、落ち着いて」。声かけする今村も自身の動揺を抑えるのに必死だった。全員無事でほっとした。夕食は備蓄のパンと紙パックのジュースでしのいだ。

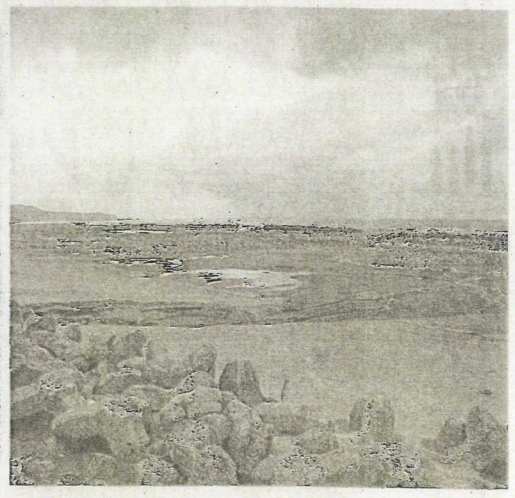
長い被災生活の始まりだった。水は出なくなり、携帯電話やガスは使えず、照明用の自家発電は数時間で止まった。余震が続き、不安が募る。今村は窓から海を見つめ祈り続けた。「どうか津波、来ないで」。後日分かったのだが、近くの海岸付近は4メートル隆起して海底がむき出しになり、家屋の倒壊が相次いでいた。

「外界はどうなったのだろう」。午後10時ごろ、携帯電話と懐中電灯を手に周囲を見て回った。田園地帯は真っ暗だった。見上げると満天の星に吸い込まれそうになった。携帯電話が一瞬通じ県に無事の連絡を入れたが、再び電波は絶えた。

遅れる復興

避難所は施設の隣にある。だが入所者が入るのは難しかった。慣れない場所で不安が高じてパニックになることもあり、トラブルが懸念されるからだ。避難所とは支援物資を融通しあったが、これも現実だった。

「大切な命を私たちが支えていかなければ」。今村は使命感を新たにした。ただ備蓄の食料と飲料水は5日分。「これからどうやって過ごしていくのか」。冷気に震え、眠れ



地震で隆起した石川県輪島市門前町の海岸線。海底が露出して砂浜が広がり、見慣れた景色が一変した（撮影・今里彰利）

今村貴子の年表

1983年	東京都内の大学に。源氏物語に魅せられ国文学を専攻、テニスにも励む
87年	大学卒業、埼玉県内などで事務職員
96年	「ふれあい工房あぎし」設立。職員に
2024年1月1日	能登半島地震

知恵を絞って生き延びた

8月末	で事務職員
9月末	「ふれあい工房あぎし」設立。職員に
2024年1月1日	能登半島地震
4月	「あぎし」で、上水が飲用できるようになる。電気、ガスに続き最後のインフラ復旧

（敬称略）

知恵を絞って生き延びた

ぬ一夜を過ごした。

今村の自宅は損傷を免れたが、大半の職員は自宅が壊れてけがをしたり、道路が寸断して出勤できなくなったりした。避難所や車中で寝泊まりしエコノミー症候群の発症者も出た。輪島市職員も被災し行政も混迷した。2007年の能登半島地震の際には市から支援物資が届いたが、今回は1日かけて受け取りに行ったこともあった。

復旧は遅れる。施設で電気や携帯電話が完全復旧したのは1月中旬、ガスは2月末まで使えず、生活用水は近くの川からくみ取った。修繕費金はクラウドファンディングも駆使して調達した。テレビが停電で見られない時期は、入所者の好きな童謡や演歌を聞かせて一緒に口ずさんだ。今村は「知恵を絞って生き延びた」と打ち明ける。

笑顔と配慮

県によると、能登6市町の障害者関連47施設全てが被災した。8月8日現在、3施設が閉鎖し、別の3施設が一時閉鎖や地元を離れる2次避難を強いられた。周囲から「早く集団避難した方が良い」と何度も迫られた。だが支援が必要な入所者だけの移動は困難で、職員も被災している。今村は同僚と相談し「とどまることを決めた」。

自宅が全壊し大けがをした施設長の雨池正春（61）は言う。「笑顔を絶やさず、職員や入所者への配慮を欠かさない彼女のリーダーシップがなかったら、苦境は乗り切れなかった」

門前町生まれの今村は「自由奔放な女性の描き方が魅力的」という源氏物語に魅せられ東京都内の大学で国文学を専攻。卒業後は埼玉県内などで事務職員として働いた。1996年の「あぎし」設立に伴う職員募集を知り「地元に戻れる」と考え応募した。

福祉経験のない自分と同じ職員が大半で「不安と手探りの毎日だった」。ゲームや農作業、小旅行を通じて入所者が見せる穏やかな表情を見て「やりがいを感じた」。障害者への偏見もあったが、次第に家族のような存在になった。

ただ世の中では障害者に対する差別や偏見はなくならない。相模原市の知的障害者施設の元職員による殺傷事件は衝撃だった。「命の選別」は許されない。入所者を見放さない。震災中もずっと肝に銘じていた。

物資支援や炊き出し、コンサートで来訪した多くの人に励まされ、入所者に笑顔が戻った。今村は被災の中で何を見たのか。「支え、支えられる絆だったかもしれない」。苦難の中に創意と覚悟があり、希望につなげた。

（敬称略、文・三井潔）

＝毎週日曜日に掲載します

町の海岸線。海底が色が一変した（撮影

原発被災、避難は困難

もっと知るために

「ふれあい工房あぎし」の約20キロ南には北陸電力志賀原発がある。能登半島地震の発生時は運転停止中だった。燃料棒の冷却に必要な外部電源の一部が使えなくなるなどのトラブルがあったが、放射性物質が漏れる事故はなかった。ただ重大事故が発生した場合には半径30キロ圏内の住民は、避難が求められる。

今回の地震で能登半島は各地で道路が寸断し、能登空港も被災して陸路と空路は復旧が遅れた。津波や海底の隆起で港は使えず、海路も断たれた。各地で集落が孤立した。

あぎしの副施設長、今村貴子は原発自体について反対の立場ではないが震災に伴う原発事故への不安は増した。「支援の必要な障害者や高齢者は自力で逃げられない」。避難想定は現実離れしており、懸念がくすぶる。

（敬称略）

この記事へのご意見やご感想を共同通信編集委員室「生き抜く」係までお寄せください。ファクスは03（6252）8741、電子メールはikinuku@kyodonews.jpです。